

論文内容要旨

論文題名：婦人科がん周術期患者のリハビリテーションの効果：リハビリテーションの有無による退院時の筋力、運動耐容能、不安、HRQOL の検討

専攻領域名：保健医療学研究科内部障害リハビリテーション領域

氏名：黒岩澄志

内容要旨

【背景】

消化器・肺・乳がんなどの患者に対する周術期リハビリテーションに関する報告は多く、高いエビデンスレベルに基づいたガイドラインが制定されている。しかし、婦人科がん（子宮がん・卵巣がん）に対する周術期リハビリテーションの報告は現在全く認めない。

【目的】

婦人科がん周術期患者に対し、術後退院までリハビリテーションの有無による術前後での筋力、運動耐容能、不安、HRQOL について検討した。

【方法】

婦人科がん手術をした 44 名を対象とした。44 名のうち 22 名は手術後退院までリハビリテーションを実施した群（以下：介入群）、22 名は手術後退院までリハビリテーションを実施しなかった群（以下：対照群）とした。評価項目は筋力（膝伸展筋力）、運動耐容能（6 MWD）、不安尺度（STAI）、HRQOL（EORTC QLQ-C30）とし、これら項目を介入群、対照群ともに手術前と退院時に評価し比較検討した。

【結果】

介入群と対照群で術前による属性や評価項目による差はない。リハビリテーションの有無に関わらず対照群、介入群ともに筋力、運動耐容能、HRQOL の多くの項目で術前と比較すると有意に低下しているが、介入群では、その低下をより抑制することが可能であった。しかも、対照群は退院直後日常生活に支障を来す筋力と運動耐容能のままで退院していることが明らかになった。HRQOL に着目すると、経済的負担の項目において術前と比較すると対照群では退院時有意に低下しているが介入群では有意差はないものの向上傾向であった。

【考察】

消化器がん術後リハビリテーションに関する報告は幾つかあり、本研究においても、対象が婦人科がんであり消化器がんでないことを考慮しても基本的には開腹手術後であることから、リハビリテーションを実施したことによって筋力、運動耐容能、疼痛、倦怠感が対照群と比較し有意に改善したと考えられる。介入群はリハビリテーションを実施することによって筋力、運動耐容能、倦怠感、痛みなどが改善し、手術や入院による機能低下を予防し、経済的負担など退院後に関わる HRQOL の改善に寄与することができたと考えられる。

退院まで筋力や運動耐容能の低下を最小限にすることが、社会復帰への自信へとつながり、不安や HRQOL が改善する可能性があることが示唆された。